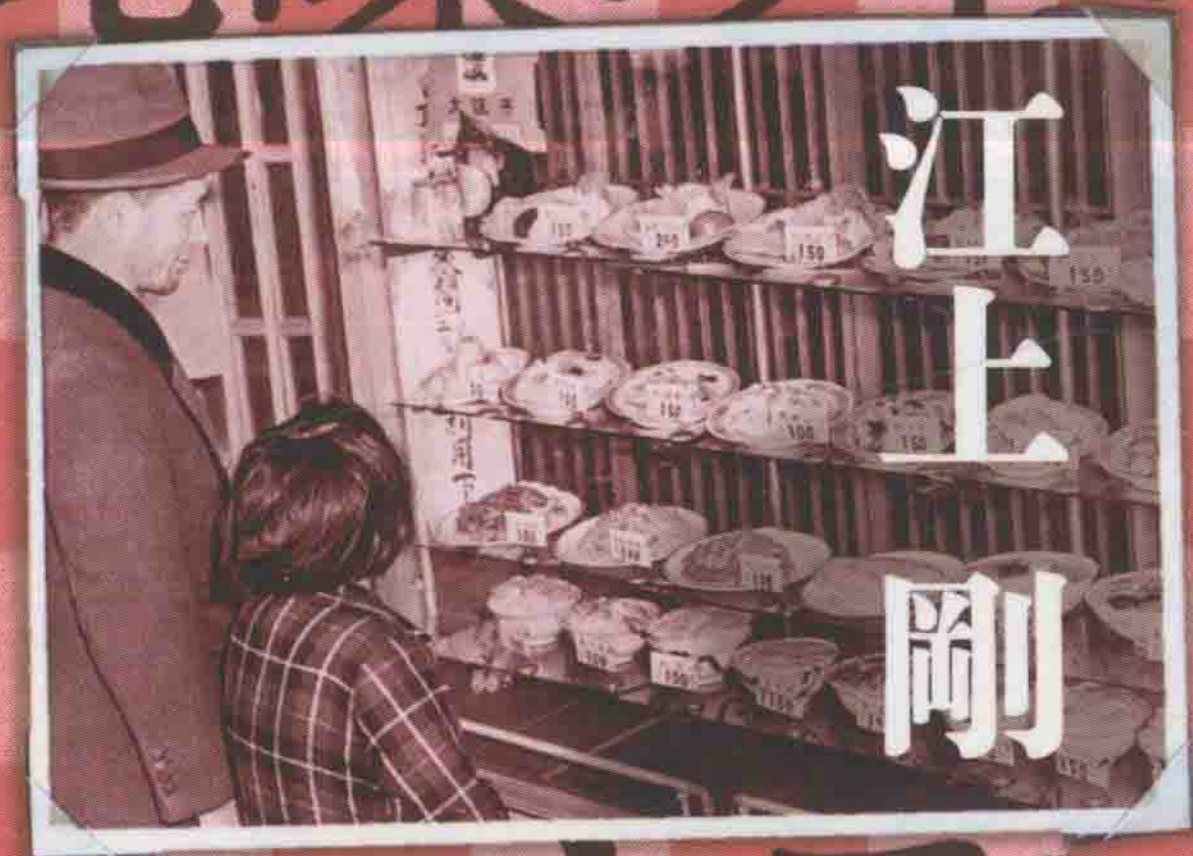


瓦礫の中の



江
上
剛

レストラン

講談社
文庫



著者 | 江上 剛 1954年、兵庫県生まれ。早稲田大学政治経済学部政治学科卒業後、第一勧業銀行（現・みずほ銀行）に入行。人事部、広報部や各支店長を歴任。銀行業務の傍ら、2002年には『非情銀行』（新潮文庫）で作家デビュー。その後、2003年に銀行を辞め、執筆に専念。他の著書に、『不当買収』『小説 金融庁』『絆』『再起』『企業戦士』『起死回生』（すべて講談社文庫）などがある。銀行出身の経験を活かしたリアルな企業小説が人気。

がれき なか
瓦礫の中のレストラン

えがみ ごう
江上 剛

© Go Egami 2013



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2013年11月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277707-0

目次

第一章 終戦 ————— 6

第二章 悶々と ————— 46

第三章 闇市 ————— 80

第四章 騒動 ————— 117

第五章 闇市解体 ————— 155

第六章 商売開始 ————— 194

第七章

難敵出現

229

第八章

戦いと挫折

265

第九章

出直し

302

第十章

新たな挑戦

335

第十一章

湊の思い

372

第十二章

新装開店

418



講談社文庫

常州大学図書館
蔵書章
瓦礫の中のスラン

江上 剛

講談社

目次

第一章

終戦

6

第二章

悶々と

46

第三章

闇市

80

第四章

騒動

117

第五章

闇市解体

155

第六章

商売開始

194

第七章

難敵出現

229

第八章

戦いと挫折

265

第九章

出直し

302

第十章

新たな挑戦

335

第十一章

湊の思い

372

第十二章

新装開店

418

瓦礫の中のレストラン

第一章 終戦

1

丑松^{うしまつ}は、終戦になっても呉^{くれ}の鎮守府^{ちんじゅふ}で戦時中と同じ暮らしを続けていた。

玉音放送はほんの少ししか聴いていない。軍港を守る山の砲台にいた。あの日は敵機の来襲もなく、のんびりとしていた。空は青く、澄み切っている。なにやら下^かが騒がしくなった。多くの兵隊が広場に集まってきている。何かを放送している。掠^{かす}れた声が聞こえてくる。調子はずれの声だ。まさか天皇の声だとは思わなかった。そんな声を聞いたことがないからだ。意味は分からない。

「戦争が終ったぞ」誰かが言った。

終った？ 終ったとはどういうことだ。急に頭が混乱した。

「戦争をしなくていいということだ。負けたのだ……」

負けた。日本が負けた。やつと理解できた。喧嘩^{けんか}をして、殴られ、蹴られ、もうあかんと降参したのだ。それが、戦争が終ったという意味だ。山を下りた。泣いている者、喚^{わめ}いている者、呆然^{ぼうぜん}としている者、さまざまだった。悲しみより虚脱感を感じた。力が抜け、ほつとため息をついた。これで家に帰ることができると思うと、嬉しくなつて、つい笑みがこぼれた。しかしいつになつても除隊命令が出ない。どうしたのだろうか。軍隊の上層部が敗戦で混乱しているのだろうか。

十月になつて人事課に呼び出され、除隊命令を受けた。終戦から二カ月が経つていた。すぐに荷物をまとめた。それでも不安でしかたがなかった。除隊を取り消され、終つたはずの戦争に行けと命令されそうな気がしていた。荷物を詰めたリュックを背負い呉鎮守府の門を出た。一分、一秒でも早くこの場を離れたい。とにかく早く逃げたい。何度も後ろを振り返つた。そのたびに確実に呉鎮守府の門が遠ざかつていく。「ほんまにえらいとこやつた」

生きてあの門を出てこられるとは思つてもいなかった。丑松は、立ち止まり、門に向かつて手を合わせた。

*

丑松は志願兵だった。大正十五年生まれの丑松は、十八歳になつて悶々としていた。丑松の村は丹波^{たんば}にあつた。丹波は兵庫県と京都府にまたがっているが、丑松が生

まれたのは兵庫県の側だ。四方を山に囲まれ、人々は少ない耕地で米や野菜を作り暮らしていた。貧しい村だった。村の青年のほとんどは兵隊にとられていた。丑松も早く戦争に行き、お国のために戦いたいと真剣に願っていた。

父母と二人の弟と住んでいた。丑松は長男だった。尋常高等小学校を出てから田畑に行くのはもちろんだが、庄屋の家の肥汲こえくみをして、十錢ほどの駄賃を貰ったり、山で薪まきを採り、町へ売りにいったりと、毎日、骨がきしむほどよく働いていた。それは丑松が働かなければ、家計が苦しかったからだ。父親は少し農業をする程度でたいした仕事もせず、昼間から酒を吞んでぶらぶらしていた。一家は若い丑松が支えなければならなかった。父親は清一せいいちと言ったが、若い頃、朝鮮に渡ったことだけが自慢の男だった。朝鮮で一旗揚げようと思っていたらしい。しかしものの数カ月で帰ってきた。それから先祖が残した財産を売っては、酒に換えていた。

出征したもう一つの理由は、丑松はその名前のとおり牛のように体も大きく、またよく食うからだだった。自分の食い扶持ぶちは自分の稼まぎで賄まかわなければならぬ。丑松が村人を驚かせたエピソードがある。ある日、田を耕す鋤すきを引いていた黒牛が、スズメバチにでも刺されたのか突然暴れ出した。黒牛は田にいた村人を蹴散らし、道路に飛び出した。そこに子供が遊んでいた。あわや子供が黒牛に突き飛ばされると、皆が目覆った。その時、丑松が現われ、黒牛の前に立ち、両手を大きく広げた。「キミ

「コ！」と黒牛の名前を呼んだ。その声は山に木霊こだまするかと思うほどの大音声だいいおんじよう。黒牛は角を地面に向け、鼻息荒く小石を吹き飛ばしたが、丑松が頭に手を添えると、大人しくなった。

「キミコ、腹が減ったのか？」

丑松が優しく声をかけると、黒牛がモーツと嬉しそうに鳴いた。村人が集まってきた。「丑松はすごいもんじゃのう」と言い、黒牛に飼葉をたつぷりと与えた。

「食うもんもやらんで働かせるから、キミコが怒ったんやろ」

「丑松は村中の牛をてなづけとるんか。こいつがキミコという名前とは知らなかったわ」

村人が黒牛を撫なでながら言った。

「俺が、勝手に名づけて、可愛がつているだけや」

丑松は豪快に笑った。そして黒牛の飼主から、お礼にともち米を一俵もらった。

後日、丑松は、このもち米をついて作った餅もちを何十個も食べ、いくつもの餅箱を空にした。村人から度胸や力も牛並みだが、食うのは牛以上だと笑われた。丹波では、ゆつたりと寛くつろぐ大きな牛の姿をかたどった置物を飾っている家庭が多い。丑松はその置物の牛のようだと言われていた。

「ワシ、志願するわ」夕飯の席で丑松は清一に言った。清一は、赤ら顔で酒臭い息を

撒き散らしながら「そうか」とだけ答えた。母親は、富江とみえというが、近在の農家の娘で、おとなしく我慢強いのが取り得の女性だった。

「お前、長男やど……」

「大丈夫や。ワシも十八になった。もう十分、お国のために働ける」

丑松は、麦や芋いもの蔓つるが入ったメシを腹に詰め込んだ。丑松が軍隊に志願しようと思つたのは、お国のために役立とうと思つたことはもちろんだが、腹が減つて仕方がないからだ。丑松の村は山間の地にあり、田は少なく、あまり米が穫とれない。その少ない米も軍に供出するため、麦と芋の蔓が主食になつていた。これではたまらん。軍隊に行けば、白いメシを腹いっぱい食べることが出来る。

「兄ちゃん、兵隊にいくんか」弟、清太せいたが嬉しように言つた。清太は丑松と四歳離れていて、勉強ができると評判だった。

「海軍か、陸軍か」いちばん下の弟、剛三ごうぞうが訊いた。剛三は丑松と六歳離れている。元気がよく、すばしっこい性格だ。

「それはまだ決めとらん。やっぱり陸軍かな」

「海軍がええ。弥一やいち叔父さんが潜水艦に乗つとられる。世話になつたらええ。メシも陸軍より多いそうや」清一が湯呑み茶碗の酒を空にして、富江に差し出した。

「もうやめとき」富江が拒否した。清一は不機嫌な顔で湯呑み茶碗をちゃぶ台に置い

た。

「海軍か……」丑松は、清一の言つたメシの一言で海軍に志願することを決めた。目の前に真白な米のメシが浮かんだ。

「兄ちゃん泳ぎができるから、海軍がええ」

清太が言つた。丑松は川で泳ぎを習つたので泳ぎには自信があつた。

「無理せんといてな。長男やから」富江が悲しそうな目で丑松を見つめた。

「美味いもん、たらふく食つて無事帰つてきたらええ。ワシもお前がおらんようになつたら、少しは畑仕事もするさかいな」清一がいつもの難しい顔ではなく、わずかに微笑んだ。

丑松は役場で志願の手続きをした。ほどなく広島の大竹海兵団おおたけへの入隊が決まつた。昭和十九年の四月末のことだ。佐伯郡大竹町さへきぐん（現大竹市）は広島県の西端、山口県に接する位置にある。町の東部は瀬戸内海に面しており、そこに海兵団があつた。丑松は汽車に乗つたことがない。村から最も近い谷川駅たにかわは、十キロメートルほど離れた町にある。そこまで歩かねばならない。丑松は、当座の下着や着替えと富江の作つてくれたおはぎを五つ、風呂敷に包んで背中にしよつた。

「しつかりな」清一と富江が家の玄関で丑松を見送つた。清一も珍しく酒を呑んでいない。二人の弟は富江のそばで所在なげに立っていた。誰も駅までは行かない。村人

の見送りもない。そもそも最近は、あまりに多くの若者が戦地に駆り出され、出征が日常的な風景となっていたので以前のように駅まで小旗を振って、ぞろぞろと行列するようなことはなくなっていた。寂しいといえば、寂しい。それも時節だと丑松は深刻に考えなかった。それよりも初めて汽車に乗り、見知らぬ土地に行き、そしてたらくく白いメシを食う。そのことを思うと気持ちはいくぶんか晴れた。

「行つて来るよ」丑松は、清一と富江に軽く頭を下げた。

「体に気をつけてな」

清一が言った。声がかすかに震えているような気がするのは、丑松の思い違いだろうか。

「無理するんじゃないよ」富江が言った。目が潤うるんでいる。

「兄ちゃん、手柄たててや」清太が言った。

「土産みやげ、たのんだで」剛三が言った。

「あほ！ 兄ちゃん、旅行に行くんとちやうぞ」清太が剛三の頭を叩いた。

「まつとれ、帰るのが許されたら土産、持って帰ってくるさかいな」

丑松はべそをかいている剛三の頭を撫でると、「ほな、行くわ」と駅に向かって歩き出した。死ぬのが恐いとかいう気持ちはない。それよりも長男なのに両親を置いて出てきたことが今頃になつて悔くやまれる。

ようやく駅に着いた。谷川という名のとおり山に挟まれている。溪谷を汽車の線路が走る。大阪から京都の福知山まで行っている福知山線が通っている。これで大阪まで出て、東海道本線、山陽本線で大竹まで行く。結構な長旅だ。陸橋を渡ってホームで待っていると若い男が階段を下りてくる。男が顔を上げた。暗い顔だ。

「おい、丑松、どこへ行くんだ」

中道茂一^{なかつみちむ}だ。隣村の同窓生だ。何かと競い合い、喧嘩もよくするが、不思議と気が合った。

小学校へ通っているときのことだ。下級生を引き連れて、学校への一番乗りを競っていた。抜かれてたまるかと丑松は先頭で茂一としのぎを削っていた。肩を突き合っている間はよかったが、そのうち体ごとぶつけ合うようになった。「なんや！ 丑松！」「痛いやないか！ 茂一！」やがて喧嘩になった。こうなると学校へ行くのはやめだ。その場で殴りあつた。下級生が泣き出したが、喧嘩は終わらない。両グループとも、学校に大幅に遅刻し、校長にひどく叱^{しか}られた。「茂一のせいだ！」「あほ丑松が悪い！」と校長の前で性懲り^{しょうご}も無く言い争う。校長が拳^{こぶし}を固め、二人の頭に、思いつきり拳骨を食らわせた。茂一は、校長の剣幕がよほど怖かったのか、泣き出した。丑松は、もう喧嘩しませんと謝った。

茂一も丑松と同じように体が大きかったが、どちらかというと茂一の方が、気が弱